

入間川とくらす

古くは、鎌倉から嵐山まで逃げたとされる際に、この地で幼い命を絶たれたといわれる源 義高(清水冠者)などの伝承があり、江戸時代には西川材を運ぶ交通の要として栄えるなど、今日に至るまで長い歴史を持つ一級河川、入間川。狭山市は、この川とともにその歴史を歩んできました。

今月は、入間川的环境や景観を守るために活動をする人や、河川敷を活用した市の取り組みなどについてお知らせします。



▲富士見橋から見た入間川(1954年)



入間川とことん活用プロジェクト 担当 商業観光課 北主査

これまでの入間川との関わり

昭和の初め、この地に住む人々は入間川と密接に関わっていました。当時は多くの人々が魚釣りを楽しみ、夏には天然のプールとして子どもたちの遊び場になるなど、人々の生活の中にはいつも「入間川」がありました。しかしながら、高度経済成長

期以降、経済性、合理性が優先され、川に「治水」(洪水抑制)、「利水」(水資源の利用)の機能を求め、大規模な護岸が整備されていきました。市が急速に都市化する一方で入間川の水質が悪化し、在来魚が減少するなど、川と人が物理的にも心理的にも離れていくことになりました。